

平成25年度
第6回新川和江賞
～未来をひらく詩のコンクール～

と き:平成26年2月16日(日)

ところ:結城市民情報センター3階多目的ホール

ごあいさつ

結城市は、ユネスコ無形文化遺産の結城紬をはじめとする伝統的な地場産業と、古くから受けつがれた文化が根付いている歴史と文化の街と言われております。

この歴史と文化を継承していくのは、未来を担う子供達です。「新川和江賞 未来をひらく詩のコンクール」は、詩の創作活動を通じて、本市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与することを目的として、平成20年度に、結城市民情報センターとゆうき図書館の開館5周年を記念する事業として、詩人である名誉市民新川和江先生の名を冠して創設され、今年で第6回を迎えます。

今年度も、市内在住・在学の小・中・高校生を対象に、詩を募集いたしましたところ、1,918点という多くの作品の応募をいただきました。これもひとえに、関係者の皆様の深いご理解と、詩を愛する気持ちの賜物と感謝いたしております。

ご応募いただきました作品は、毎年いずれも力作ぞろいで、選考には大変ご苦労されたと同っております。受賞されました皆様に心よりお祝いを申し上げますとともに、惜しくも選に漏れました皆様も、今後ますます詩に関心を持たれ、来年も応募していただきますことを期待しております。

皆様が、詩の創作活動を通じて、個性豊かな創造力を育み、豊かな心で毎日を過ごされますことを願い、ごあいさつといたします。

平成26年2月16日

結城市長 前場 文夫

くだもの 果物も、詩も・・・。

私が十四、五歳の頃は、アメリカを相手にした戦争の真っ只中で、日本じゅうが食糧難にあえいでいました。入学したての女学校（現在の県立結城第二高校）は、木造二階建ての校舎も新しく、校庭もまだすっかりは整地されていない状態でしたから、私たち新入生は、当時下り松さがまつにあった競馬場から、芝草を三十センチ角ほどに切り取って運んで来て、コの字型の校舎に囲まれた中庭に、芝生づくりをしたのです。でもそれがきれいに根付いた頃には、食糧事情はさらにきびしくなって、いたし方なく芝生を剥がし、南瓜やじゃがいもやさつまいもの苗を植えたのです。

このようなことをはじめに書かずにはいられない気持ちになりましたのは、先日図書館での集会に、鹿窪かなくぼにお住まいの会員が、味見をして、と持参してくださった幾種類もの葡萄ぶどうが、房もずっしりと重く実も大粒で、紫やうす緑に色もそれぞれ美しく、ひと粒もぎって口に含んでみましたら、思わず歓声をあげてしまったほどに、甘くておいしかったのです。

葡萄ばかりではありません。夏も来ぬ先から、高級果実店に並ぶような小型の西瓜や、メロン、生食もできるとうもろこし、トマトなどなど、昔は考えられなかったみごとな果物や野菜が、この結城の土から、ぞくぞくと生産されているのです。

新川和江賞第六回の選考がはじまり、年ごとにふえる応募作品に、うれしい悲鳴をあげながら拝見してゆくうちに、つよく感じましたことは、果物や野菜ばかりでなく、こんなにもすぐれた詩も、結城の風土は産み出しはぐくんでくれているのではないか、ということ。詩という表現形式への関心も高まり、著名な詩人たちの詩を読みはじめていらっしやるようすがうかがえる作品にもいくつか出会えて、たのもしく思いました。私が師事した詩人の西條八十先生は、「文字の勉強は読書いがいにありません」とおっしゃって、たくさんの詩集や翻訳書を貸してくださいました。

自分の書いた詩に、二、三日、うっとり見とれていてもよいのですが、それだけでは、詩は上達いたしません。おいしい果物を実らせるためには、〈摘果〉をしなければなりません。詩も、不用な言葉を取りのぞくと、のこされた言葉がかがやき出して、詩をひきしめ、イメージをあざやかにしてくれます。作品は、できた、できた、とすぐ手放さずに、じっくりと時間をかけて付き合ひましょう。

皆さんが、長く詩を書き続けてくださることを願って、今年は、このようなことを書いてみたくになりました。

平成26年2月16日

新川和江ニ

ことばはいつ 詩となるのであろう
猿に噛みくだかれた木の実は
むろの中で年月を経て酒となるように
夜ふけに草をしめらせたり露が
あけがた葉末で玉となるように

新川和子 2

次 第

日時 平成26年2月16日(日)
午後2時より
場所 結城市民情報センター
3F多目的ホール

●オープニングセレモニー

新川和江氏作品 「花の名」の群読（優良賞 21名）

●表彰式

- 1 開式のことば
- 2 主催者あいさつ
- 3 来賓あいさつ
- 4 表彰
- 5 第6回受賞作品朗読 新川和江賞（1名）
優秀賞（9名）
優良賞（21名）
- 6 新川和江氏による講評
- 7 閉式のことば

●受賞者氏名

☆新川和江賞（最優秀賞）

変わらない日々

結城東中学校 2年 みや た わ か な
宮田 和佳奈

☆優秀賞

おとうと

江川南小学校 1年 と つか そう た
戸塚 宗汰

ぼくのカメ

山川小学校 2年 うえ の こう た ろう
上野 倅大朗

プラネタリウム

城南小学校 3年 う が もち せい や
宇賀持 星耶

きぬ川の小魚

絹川小学校 3年 た むら せ な
田村 星夏

鼓動よー結城紬太鼓ー

絹川小学校 4年 うえ の まな ほ
上野 真歩

雨

江川南小学校 4年 わた な べ なお と
渡邊 直翔

プランクトン ライフ ハロー

結城中学校 2年 よこ しま のり か
横嶋 紀香

雑木林

結城東中学校 3年 き むら かん た
木村 寛太

花火

結城第二高等学校 1年 さくら は つ な き
櫻庭 津奈希

☆優良賞

ぼくのはてな

結城小学校 1 年

ねもと とも の しん
根本 倫之進

命の音

結城東中学校 1 年

いまいずみ たまき
今泉 珠季

おかあさん

城南小学校 1 年

おおき あや な
大木 綾菜

耳をすませて

結城中学校 2 年

みつほし あや か
三星 綾花

はじめてのなつやすみ

城西小学校 1 年

かめだ じゅらい
亀田 珠礼

H₂O

結城南中学校 2 年

た なか ともゆき
田中 智之

さんぽ

上山川小学校 1 年

おおた ともひろ
太田 朋宏

鮮やかなブラックホール

結城中学校 3 年

いししま かえで
石嶋 楓

いちばんぼし

江川北小学校 1 年

ひらつか さら
平塚 紗羅

ぼくらは、受験生

結城中学校 3 年

わたなべ ともゆき
渡邊 智之

くも

城西小学校 2 年

いわた な な
岩田 那奈

一秒

結城南中学校 3 年

ふなばし ゆう と
舟橋 湧斗

虫かご

結城小学校 3 年

ふじぬき てつ や
藤貫 哲矢

雨の日の音

結城第二高等学校 1 年

マルティネス カテリーナ ヒラリ

かぜがおしてくる

上山川小学校 3 年

うえの み はる
上野 未遥

大人と子供

結城第二高等学校 1 年

やまぐち まな み
山口 愛美

やさしい気持ち

山川小学校 5 年

やまなか きょう
山中 響

蝉の抜け殻

結城第二高等学校 2 年

かわしま てつ や
川島 徹也

ふいていく風

江川北小学校 5 年

さかいり もとき
坂入 幹

今

結城第二高等学校 2 年

くりはら あす か
栗原 明日香

アルバム

結城中学校 1 年

ねつ なお
根津 奈央

新川和江賞

変わらない日々

結城東中学校 二年 宮田 和佳奈

朝早く、小さな花は咲いていた
道端で、犬は足を引きずった
道歩く、子ども達はもめていて
いつも同じ、同じ日々
今日も道を歩く自分
今日も世界は変わらない

朝早く、小さな花はかり取られ
道端で、今日は犬はいなかった
道歩く、子どもの一人は泣いていて
少し変わった、今日この日
今日も道を歩く自分
少し世界は変わってて

朝早く、そこには小さな芽が出て
道端で、仔犬が三匹増えていた
道歩く、子ども達はみな笑い
今日も道を歩く自分
顔は少し緩んでて
世界は今日も変わってる
あきる暇もない程に

短評 新川和江賞「変わらない日々」

「日々」が、変わらぬおだやかな過ちを行くこととは、なんと
とありがたいことであろう。しかし、変わらぬ過ちを行くこと
えながら、注意して見回してみると、毎日、少しずつ変化は生じ
ているのです。そのことこそ、宮田和江の「日々」の目と心は、
すでに述べた詩人のものです。たとえば各連、朝早く、道端
に道歩く、の書体に出て描き出されるイメージが、連が変るこ
とに微妙なちがいを見せていること、読者も気づかぬところで
う。けっして特別なものではない、誰もが目にするありふれた情
景を採り上げてくること、その構成の巧みさ、驚かされるべき
宮田和江、ほかの詩もぜひ見せてほしい。

●受賞作品

おじいじ

江川南小学校 一年 戸塚 宗汰

ぼくに おとうとができた。
なまえは ゆうた。
ずっと おにいちゃんになりたかったから
すくすく すくすく うれしい。
ゆうたがうまれるまえは
ぼくが おとうとだった。
わがママをいっぱいいえる
おとうとだった
でも、いまは がまんできる。
だって おにいちゃんになったから。
ちゅうしゃも がまんできる。
はいしゃだって ひどりでだいじょうぶ。
おかあさんのよこは
いつだって ぼくのぼしょだったけど
ゆうたがいるから ぼくは ひどり。
ちよっと さみしいけど しかたがない。
ゆうたのなまこえは すくおおまきい。
いままで いちばんおおこえで
なっていたのは ぼくだった。
でもいまは、おとうとだ。
なまむしも おとうとにあげたんだ。
ゆうたは ちいさいで ぼくをなでる。
すこしいたいけど きもちいい。
このちいさなゆうたのてで

ぼくと おにいちゃん
おかあさんと おとうさんを
つないでくれている。
ゆうた、ありがとう。

短評 「優秀賞」おじいじ

なんてえらいおにいちゃんなんだろうと、よみおえたあと、き
つくたきしめてあげたくなりました。いままで、おかあさんのよ
こは、くすんだって、ぼくのぼしょだったけど、いまは、おじいじ
のぼしょ。さびしくっても、がまんしなけりゃねえ。なんてった
って、おにいちゃんなんですもの。

おとうとができて、おにいちゃんになったら、くすむなまきもちを、
こんなしょうじきに、いじらしく、かかれた詩にはじめてであ
いました。なみだぐんでしまいました。

優秀賞

ぼくのカメラ

山川小学校 二年 上野 倅大朗

ぼくの家には、カメラがある。
名まえはカメラきち。
とってもかわいいよ。

朝、そーっとのぞいて見ると
水の中からにっこりかおを出してにっこちを見てくるよ。
おなかがすいているのかな。

昼、そーっとのぞいて見ると
水そうのはじっこでにっこりお風おしてくるよ。
カメラもゆめを見るのかな。
しずかにしずかにしてあげよう。

夜、そーっとのぞいて見ると
水音をたてておよいでいるよ。
気もちよさそうだな。

短評 優秀賞「ぼくのカメラ」

朝も、昼も、夜も、にっこりしたるうくんは、カメラきちくんのいる水
そうを、のぞいてあげているんですね。それも、おどろかさな
いように、そーっとくちやまこいっ。そうしてカメラきちくんですが、どんな
カメラをされているか、ていねいにえがいて、私たちに、おしえて
くださっています。ありがとうございます。カメラきちくんに、よろしくね。

優秀賞

プラネタリウム

城南小学校 三年 宇賀持 星耶

見上げた空
光る星
とおいせかいの銀河系

どんなに広い うちゅうよりも
ぼくの頭の中の プラネタリウムの方が
すうーと広い
ぼくの友だちは みんなうちゅう人
しょうかいしましょう
ダレダレ星人
ピコピコ星
ジエット星人
小わく星でドッチボール
ブラックホールでかくれんぼ
すい星でサーフィン
金星でサバイバルゲーム
月ではやっぱりもちつき大会

短評 優秀賞「プラネタリウム」

宇賀持くんは、頭の中に、ご自分だけのプラネタリウムをお持ちなのですね。たしかに人間の頭脳は、宇宙よりも広い。どんなことでも、思い描くことができます。

すてきな名前の宇宙人のお友だちも、たくさんいるのですね。こんど私も、宇賀持くんの頭の中の宇宙に、おたずねしようかな。<すい星でサーフィン>なんて、今夜夢に見てしまいたい。

優秀賞

きぬ川の小魚

絹川小学校 三年 田村 星夏

雨あがりの後きぬ川には、小魚たちがピチピチおどってる
大きな魚もおどってる
つり人もかさをなげておどってる
水面のアメンボもおどってる
ふかいところにいるコイもおどってる
はしの下の小魚たちは、うれしそうにピチピチおどってる
岩場の小魚たちもピチピチおどってる
なんだか川も楽しそう
きぬ川の生きものたちもみんなおどって楽しそう
ほくの心もおどってる

短評 優秀賞「きぬ川の小魚」

私が生れて育った小森という集落を流れる川は、田川といいましたが、田村さんのお家のある久保田まで行くと、鬼怒川に合流して川中が広くなるのでしょね。田川では私も幼い日、友だちと田高すくいもしましたし、父が釣ってくるアユやウグイで育ちました。

今でも久保田のほうでは水が豊かに流れていて、コイや小魚たちが、こんなにピチピチ泳いでいるのかと、とてもなつかしく思いました。魚もアメンボも、そして釣り人も、作者である田村さんの〈ほくの心もおどってる〉とは、なんとたのしい風景でしょう。

優秀賞

鼓動よー結城紬太鼓ー

絹川小学校 四年 上野 真歩

高なるむねの鼓動…

力のかぎりわたしはたたく

空高くつきあげる鼓動

ドンドンドン

その後を追いかけるようにやさしくひびく

ピーヒャラピーヒャラララー

太鼓のリズムに合わせて笛がひびく

バチを持つ手に

体じゅうの力をこめて

わたしの思いすべてをこめて

バチは歌う

わたしの鼓動よ

天にとどけひびくまちのはんえいを願う音色

ふるさと結城の

ふるきよき伝とうを受けつぐために

わたしは「結城紬太鼓」をたたきつづける

む心でたたく

む中でたたく

その時、わたしが一番楽しいと感じる時

一番、わたしの体が喜びのリズムをきざむ時

メンバーと目を合わせ心を合わせ息を合わせ

はらのそこから

「ヤァー」「ソッソッ」

合いの手を入れながらたたく

かんきゃくも、リズムに合わせておどろ出す

みんなが笑顔になり

ドンドンドンドンドン

会場が一つになる

「結城紬太鼓」、わたしが守りたいのでいへ

短評 「優秀賞」鼓動よー結城紬太鼓ー

千有余年の伝統を持つ結城紬の技法が、平成二十二年、ユネスコの無形文化財遺産に登録されました。それを記念して、「結城紬太鼓」という新しいリズムの打ち方が創作されたのでしょうか。上野さんがたたくその太鼓を、今度機会があったら、ぜひ聴かせて頂きたいと思います。こういう内容を持った詩は、表現がむずかしいのですが、しっかりと、よく書けています。同じふるさと人として、ありがとうと、お礼を申し上げます。

優秀賞

雨

江川南小学校 四年 渡邊 直翔

雨

いろいろな音の雨

葉っぱに当たってぼとん

子ねこのしっぽにしゅるん

まどに当たってぶちん

家の屋根にぼとん

地面にぼたん

車に当たってぶちん

かさの当たってぼらん

雨 雨 雨 雨

いろいろな音の雨

短評 優秀賞「雨」

雨は、天の心をうたう、ミュージシャンなのでしょう。地上のあらゆるものを楽器にして、雨は、えんそくをしています。

渡邊くんはよい耳をお持ちで、それぞれにみながう音がすることを聞き分けています。子ねこのしっぽにしゅるんが、とくづくにかわいい音でした。イギリスでは、すべれた詩人のことを、「あの人はよい耳を持っている」と言っただろうですよ。

優秀賞

プランクトン ライフ ハロー

結城中学校 二年 横嶋 紀香

小さな体で大きな世界
いつでも僕は旅をする
行くあてもなく
たださまよう
皆は僕にきづかない
ここにいるのにきづかない
きっと見えない
僕の姿は見えていない
君の中にも僕はいる
海の中にも僕はいる
水の中にも僕はいる
魚に食べられても僕はきえない
君はいつきづくのか
僕はいつもまっている
小さな仲間とまっている
君に姿を見られる日
顕微鏡からこんには

短評 優秀賞「プランクトン ライフ ハロー」

なんでも詩の題材にはなるのですが、プランクトンに着目して、プランクトン自身になりすまして書かれた詩というのは、はじめてお目にかかります。水中の浮遊生物に、横嶋さんはとくに関心がおありになって、未来は生物学者になる夢をお持ちなのでしょう。おしまいの行がじつにしゃれていて、効果をあげています。

優秀賞

雑木林

結城東中学校 三年 木村 寛太

昼、雑木林には太陽の光が差し込む
日光は大地を温め、大地は目覚める

とても暑がりな雑木林の住民たち
今は隠れている木の葉の裏のリビングに
今は隠れている土の中のお茶の間に
クーラー効かして涼んでいる

夜、日が沈み、月明かりが辺りを照らす
月光が大地を冷まし、大地は休息する

行動を開始する雑木林の住民たち
彼らは求める林の奥のレストランを
彼らは求める林の奥のセルフバイキングを
行列のできる食堂に並んでいる

満腹になり、大満足の住民たち
朝日が昇ると、自宅に帰り食休み

短評 「優秀賞」雑木林

私も雑木林が好きで、とくに梢がけむっているように見える、芽
ぶき時の雑木林を、車窓から眺めて過かすのが好きなのですけれど、
木村さんのこの雑木林は、じつにダイナミックで、豊かすぎるほど
に幻想的。そこに住んでいる住民たちの暮らしを、アニメーシ
ョンでも見るように、たのしく教えて頂いたのは、はじめてです。
雑木林を見るたびに、「これから、この詩を思い出すたびにどうしよう。

優秀賞

花火

結城第二高等学校 一年 櫻庭 津奈希

光の玉が尾をひいて、暗闇を照らす
その光がはじけて、散り散りに消える
灯りが消えるまでの間、君の横顔が見える
また上がって、また消える
君は夢中でそれを見る
色とりどりの灯りが花開くたび、
君は光を目で追いかける
光はとても美しいけど、
僕は君しか目に入らない
最後の玉が上って開いて、
残念そうな君を照らす
明りのなくなつた暗がり、
きれいだったね、と君が笑む
僕からすれば、花火より
見つめる君が素敵に見えた

短評 優秀賞「花火」

すてきですね。高校生ですものね。このような恋の詩が書かれなければ、私はかえって心配してしまいます。この頃の若い方たちのお名前は凝っていて、文字を見ただけでは女子か男子かわかりませんが、僕と自称はしていても、これは好きな男の子になり代って、女の子が書いた詩ではないか、そんな気がします。男の子は照れてしまって、恋の詩はなかなか書かない。結びの二行など、こんなセリフが言えれば、もう、恋のベテランですものね。

優良賞

ぼくのはしな

結城小学校 一年 根本 倫之進

かぜはすくえるかな。
かぜはひろえるかな。
かぜはつかまえられるかな。
かぜはどこからくるの。
かぜはちきゅうこびのくらにあるの。
あつかぜ。
つめたいかぜ。
きもちいいかぜ。
こわいかぜ。
すくってたべたらあまいかな。
ぼくの中のかぜははてなだらけ。
そして、ぼくはかぜとさんぼする。

優良賞

おかあさん

城南小学校 一年 大木 綾菜

おかあさんはいろいろなにおいがする。
あさ、めざめたら、
おひさまのようなあったかいにおい。
がっこうからかえってくるど、
たくさんのせんたくものにかこまれて、
ふんわりせんざいのおい。
ゆうがた、トントン、シューシュー、
よだれがでそうなおいしそうなにおい。
よる、おやすみなさいといった。
ちよっぴりおさけのおいがする、
おかあさん。
わたしは、おかあさんのおいがすき。
おかあさんのおい、いいにおい、
おいしそうなにおい、ちよっとにがてなにおい、
そんないろいろな、おいがたのしみ
おかあさん、あしたは、どんなにおいがするのかなあ。
ぐっすりねむってまたあした。
「おやすみなさい。」

はじめてのなつやすみ

城西小学校 一年 亀田 珠礼

はじめてのなつやすみ
じりじりとてりつけるたいよう
あせがだらだらとじめんにおちる
きがつくとひぐらしのこえ
とおくからきこえるかみなりのおと
まるでおまつりのたいこみだい
たんぼからはかえるのなきこえ
いえにつくとつせんのおめ
かえるとかみなりのおとが
まるでいっしょにうたってみたい

わんぱ

上山川小学校 一年 太田 朋宏

おおきくてあおいそらに、
まっかなたいようが
しずんでいく。
ゆっくりゆっくり。
ぼくとおにいちゃんパパとママ、
さんぽしている。
いっぽいっぽ、
けがしたママのはやせにあわせて。
かせにふかれて、
いなほがねむっている。
こっくり、こっくり、
よじんのかげがのびる。
ながくながく、
いつまでもよじんでわたるぽ
できるじいじな。

優良児童

くもるぼし

江川北小学校 一年 平塚 紗羅

ゆうがたすずしいそよかぜがふいてきた
そして、ふうりんが、やさしくやさしくちのりんとしたよ
わたしは、ママといっしょにおにわにでてゆうやけぞらを
みあげたよ
あかとおれんじのくものあいだに
きらきらかがやくほし
ーばんほしをみつけたよ
あのほしは、だいすきだったおおばあちゃんのほしかな
ママも、こぐりとくびをさげたよ
よるになってもうーどおにわにでてみるよきらきらしたほしが
くうんと上にのぼっていたよ
なんだかとってもげんきがでたよ
わたしをみまもってくれているんだね

優良児童

くも

城西小学校 二年 岩田 那奈

くもって、ふしぎ
いろいろなかたちになるから
お空を見るとくじらがおよいでた
あっ、こっちからおふね
きょうのくもは、うみのふうけい
お空を見ていたらうきぎがはしってた
あっちのおおきいのはくまかな
きょうのくもはもりのふうけい
くもって見るたびにかたちがちがう
あしたはどんなかたちが見えるのかな

優良賞

虫かい

結城小学校 三年 藤貫 哲矢

きみはだれ。
ぼくが見つけたよう虫は、
モコモコ黒い毛をつけて、
一生けんめい歩いている。
ミントの葉っぱをたくさん食べて、
大きく、みどりの色になっちゃった。
動かなくなっただと思ったら、
形をかえて、さなぎになった。
ねえねえ、いつまでねているの。
ぼくは、はやく会いたくて、
ずっとずっとまっているのに。

あれ、
ぼくの虫かい、
きれいな二ひきのあげはちょう。
きみだったんだね、こんにちは。

青い空へ、
キラキラはばたくあげはちょう。
うれしそうに、羽を大きく広げて、
とんとんく。
ぼくは、見えなくなるまで、
ずっとずっと見ていたよ。

優良賞

かぜがおしてくる

上山川小学校 三年 上野 未遥

かぜがおしてくる
うすい手でおしてくる
歩くわたしたちのうしろから
かぜがおしてくる
ブランコに乗ると
こいでいないのに
かぜがおしてくる
いつまでも
わたしのうしろからういてくる
ずっとかぜがおしてくる
たのしそうにおしてくる

優良賞

やわらかい気持ち

山川小学校 五年 山中 響

青くすんだ空
わたのような白い雲
色とりどりの草花
風と話す木々

庭木をせんていするおじいちゃんのせなか
草取りをするおばあちゃんのすがた
台所で料理するお母さんのほうちょうの音
楽しそうに笑う友達の声

ぼくの目にうつるもの
ぼくの耳に聞こえるもの

なにげない全てのものが
いつもぼくをやさしい気持ちにしてくれる

優良賞

ふんわり風

江川北小学校 五年 坂入 幹

風はふいていく
どこかに行きたくて
草原をぬけ
山をこえる

でもどこに行きたいのか
何がしたいのか分からず
ただふいていく風

旅人みたいにただと方にくれている
そんなふう

ふいていく風

優良賞

アルバム

結城中学校 一年 根津 奈央

アルバムを開けば
お母さんに抱っこされて
笑っている赤ちゃんの頃の私
ページをめくれば
少しずつ成長しているアルバムの中の私
泣いたり、笑ったり、怒ったり
そして中学生になった私
アルバムには、私の切り取られた時間が
たくさん詰まっている
早く大人になりたいと急ぐ私に
「ゆっくりでいいよ」と
母が笑う
私はゆっくり、時には走って
大人になっていく
いつか大人になって
アルバムのページを開けば
母によく似た大人の私がいるだろう

優良賞

命の音

結城東中学校 一年 今泉 珠季

ドックン ドックン ドックン
生まれたての赤ちゃんも
お年寄りのおじいちゃんも
みんな亡くなるまでなっている
どんなにぞうのような大きな動物も
どんなにありのような小さな生き物も
一日でも多く生きられるように
毎日毎日ドックンドックン
でもいつかはだれもとまる
明日かもしれない
一カ月後かもしれない
一年後かもしれない
それはだれにもわからない
だから一生懸命毎日を生きている

優良賞

耳をすませて

結城中学校 二年 三星 綾花

いつもの日常
いつもの風景
いつもの友達
それは同じ毎日ではない
笑ってる自分
怒ってる自分
泣いてる自分
毎日が新しい感情 毎日が違う感情
この世界にある全てのモノ 木 人 花 水
毎日 変化している
同じだなんてありえない
森のざわめき 水のせせらぎ 人の表情
花のきらめき 風のそよ風
耳をすませて 聞こえる声 全てが違う
世界にあるモノ全て 新しい生きモノ
毎日 輝きにあふれてる
さあ 耳をすませて

優良賞

H₂O₂

結城南中学校 二年 田中 智之

水は気儘だ
熱くなったら上に行き
気儘に行きたい所へ行き
地に戻りたくなったら戻り
時に災いとなる
これを操り返し
永遠とわに生きていく

僕も水のように気儘に生き
水のようにそっと浮き
どこかの空の向こうまで
ずっとずっと旅していたい

優良賞

鮮やかなブラックホール

結城中学校 三年 石嶋 楓

本を開く
無機質な白と、整った黒が見える
鮮やかな色は、ない
けれど私は、引き込まれてしまうのだ
色とりどりの、物語に

激しい恋を、
悲しい愛を、
思わず吹き出すような小喃を、
本は語る
静かに、しかし饒舌に、
私達を、物語に引きずり込む
一度引き込まれたら最後、
物語のとりこだ

そこには色があり、
音があり、
温度がある

本を開けば
私はその物語の一部になる
本の引力に引き込まれて
私は今日も、
白と黒の鮮やかな世界を
ふわふわと漂っている

優良賞

ぼくらは、受験生

結城中学校 三年 渡邊 智之

ぼくらは、もう受験生
毎日、勉強の日々
けれど、たまに
あのころにもどりたいて思う
部活も無い
受験も無い
あのころに
帰ってくれば
ランドセルをなげ
外へ行き
くたくたになって
かえってくる
毎日が自由の
あのころへ
みんなとあそび
ケンカして
最後は、みんな仲良くなって
またあそぶ
すごく楽しかった
あのころへ
だけども、ぼくは受験生
あそびも行かない
ただひたすら机にむかう
昔へもどりたい
だけど、いがいにこれも良いかもしれない
だってこれをがんばって合格すれば
きっとまた
あたらしいけど楽しい世界が
ぼくをまっさいそうだから

優良賞

一秒

結城南中学校 三年 舟橋 湧斗

最後の一秒まで
あきらめてはいけない
ホイッスルがなるまでは
あきらめてはいけない
一点差で負けていても
十点差で負けていても
ホイッスルがなるまでは
あきらめてはいけない
あきらめてしまったら
試合終了
あきらめなければ
きっと何かある
そう思い
最後の一秒まで
僕たちは全力で
ピッチをかける

優良賞

雨の日の音

結城第二高等学校 一年 マルティネス カテリーナ ヒラリ

雨の降る音
しずくが落ちる音
かみなりが鳴る音
地にたまった水が流れる音

ザーザー
ポタポタ
ゴロゴロ
ザ——・・・

静かな日の歌
意味のない単純な音
その音に心落ちつく
そんな静かな雨の日の音

優良賞

大人と子供

結城第二高等学校 一年 山口 愛美

大人って、何なのだろう。
何をもって、大人というのだろう。
仕事が一人でも出来る事か。
器が大きい事か。
上手に嘘がつけるようになる事か。

反対に、子供とは何なのだろう。
どうして、子供と言われるのだろう。
一人だと満足に仕事が出来ないからか。
怒りやすいからか。
嘘をつくのが下手だからか。

大人に出来る事が、子供には出来なくて、
子供は出来る事が、大人には出来なくなる。
大人と子供。
とても曖昧なその二つ。
その真ん中に私はいる。

優良賞

蝉の抜け殻

結城第二高等学校 二年 川島 徹也

蝉の抜け殻が一つの生き物としてしか見えないのは、きっと彼らの全てがそこに詰まっているからなのだろう。

7年と7日間 7年間の、自分はここに居たという唯一の確かな証を、彼らは宵の木立に残して飛び立つ。

彼らは、このとき、一つの「生き物」に生まれ変わるのだ。

私達にとってはからっぽの抜け殻にしか見えなくても、彼らにとってはその残された傷の一つ一つが、消えることのないアルバムなのだ。

優良賞

今

結城第二高等学校 二年 栗原 明日香

私、十七歳になりました

十七年分の思い出は

手のひらに汲んだ水のように

キラキラとサラサラと

昔のものから少しずつ

零れ落ちて消えていきます

忘れたくない、忘れられたくない

昨日までの過去の私

貴方を忘れないために

明日からの未来の私

貴方に憶えてもらうために

過去を振り返りながら

未来を見つめながら

私、今を生きています

—新川和江氏について—

- 昭和 4 年（1929） 茨城県結城郡絹川村（現結城市）小森に生まれる。
- 昭和 19 年（1944） 詩人の西条八十氏に師事。
- 昭和 28 年（1953） 第一詩集『睡り椅子』を出版。代表的な詩集に『ローマの秋・その他』、『ひきわり麦抄』、『星のおしごと』等多数。
- 昭和 35 年（1960） 『季節の花詩集』で小学館文学賞受賞。
- 昭和 40 年（1965） 『ローマの秋・その他』で室生犀星詩人賞受賞。
- 昭和 56 年（1981） 日本現代詩人会理事長就任（～1982）。
- 昭和 58 年（1983） 女流詩人による季刊詩誌、「現代詩ラ・メール」を創刊。
日本現代詩人会会長就任（～1984）。
- 昭和 59 年（1984） 結城市民栄誉賞受賞。「結城市民の歌」作詞。
- 昭和 62 年（1987） 『ひきわり麦抄』で現代詩人賞受賞。
- 平成 4 年（1992） 『星のおしごと』で日本童謡賞受賞。
- 平成 6 年（1994） 『潮の庭から』で丸山豊記念現代詩賞受賞。
- 平成 10 年（1998） 児童文化功労賞受賞。『けさの陽に』で詩歌文学館賞受賞。
- 平成 11 年（1999） 『はたはたと頁がめくれ…』をはじめとする全業績に藤村記念
歷程賞受賞。
- 平成 12 年（2000） 勲四等瑞宝章叙勲。『いつもどこかで』で産経児童出版文化賞
JR賞受賞。
- 平成 13 年（2001） 結城市名誉市民となる。
- 平成 16 年（2004） ゆうき図書館名誉館長就任。
- 平成 19 年（2007） 『記憶する水』で現代詩花椿賞受賞。
- 平成 20 年（2008） 『記憶する水』で丸山薫賞受賞。
結城市民情報センター及びゆうき図書館開館 5 周年記念事業
として「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」を創設。
- 平成 22 年（2010） 日本現代詩人会名誉会員。
- 平成 24 年（2012） 石像「野の花」を寄贈。結城紬大使就任。

—新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～について—

[目的] 結城市出身の女流詩人新川和江氏による「詩」の創作活動の指導を通じて、結城市の文芸振興を図るとともに、積極的に未来に向かう創造性豊かな青少年の育成に寄与する。

[募集作品] 自由題の未発表詩

[応募資格] 結城市在住、在学の小・中・高校生

[選者] 新川 和江（最終選考）

関 和代

山中 和江

吉田 峰代

[経過]

- 平成 16 年 5 月（2004） 新川和江選「未来をひらく詩のコンクール」開催
（結城市制 50 周年記念及びゆうき図書館開館記念事業）
●募集作品：「私（わたくし）が大人になったら」・「私（わたくし）のふるさと」のいずれかを題材とする
●応募資格：結城市及び隣接市町村在住の小・中・高校生
●最優秀賞：『わたしのふるさと』
児矢野 千穂（三和町立大和田小学校 2 年）
- 平成 21 年 2 月（2009） 第 1 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
（結城市民情報センター・ゆうき図書館開館 5 周年記念事業）
●新川和江賞：『あまいみをならしてね』
海老澤 匡希（山川小学校 2 年）
- 平成 22 年 2 月（2010） 第 2 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『夏』
向田 浩哉（結城小学校 5 年）
- 平成 23 年 2 月（2011） 第 3 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『ランドセル』
野呂瀬 早紀（結城小学校 1 年）
- 平成 24 年 2 月（2012） 第 4 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『石』
藤野 里菜（結城東中学校 2 年）
- 平成 25 年 2 月（2013） 第 5 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『日記詩』
海老澤 朋代（結城南中学校 1 年）
- 平成 25 年 3 月（2013） 「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」5 周年記念誌
発行
- 平成 26 年 2 月（2014） 第 6 回「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」開催
●新川和江賞：『変わらない日々』
宮田 和佳奈（結城東中学校 2 年）

—結城市民の歌—

新川 和江 作詞

1. おはよう結城 わたしたちの市(まち)
むらさきの筑波のみねから
太陽ののぼる市です
鬼怒川の流れのほとり
千年の昔も今も
娘らがはた織る音の
高らかにひびく市です
名にし負うつむぎのふるさと結城
2. こんにちは結城 わたしたちの市(まち)
旅びとも歴史をたずねて
おとずれる城下町です
いにしえの文化の上に
あたらしい未来をひらく
ひとびとが心寄せ合い
すこやかに暮す市です
かぎりなく伸びゆくふるさと結城
3. こんばんは結城 わたしたちの市(まち)
はつ夏はあの道この道
桐の花におう市です
桑の実にくちびる染めて
幼い日あそんだ友が
祭りには胸はずませて
遠くから帰る市です
なつかしい灯ともすふるさと結城

雨云は

新川和江

白い雲が

うかんでいます

わたしが

生まれたい日も

雲は

うかんでいたでしょうね

あかあさんが

セーラー服の

仲夏をたったい日も

うかんでいたでしょうね

おみやげのおおの

せんねんすか

はじめて土のうえに

サカをきいた日には

雨になつたり

雪にひらつたり

風といつしよに

旅をしたりして

雲は

うかんでいたでしょうね

花の名

新川 和江

もも

ゆきやなぎ

みつばつつじー

花の名をいうときには

この春やっど

ひらがなを覚おぼえたちいさな妹が

やわらかな鉛筆えんぴつで

一字書いては

うれしげににっこりするよつに

わたしは発音はつおんするのです

やはり ひらがなで

えにしだ

こぶし はなみずき

そして さくら……

